

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 23 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520980

研究課題名(和文) 東アフリカ牧畜民の「五感」に基づく世界知覚に関する人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study of East African Pastoralists' Perception of the World through the Five Senses

研究代表者

河合 香史 (Kawai, Kaori)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：50293585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：東アフリカ牧畜民が「身の回り世界(Umwelt)」を、いかに全体的な知覚によって把握しているのかについて、人類学的な視点および方法から解明することを目指した。人類には「五感」と呼ばれる知覚機能が備わっている。知覚機能の統合性は人類の自然的、進化的基礎であると同時に文化的・社会的な構築でもある。本研究ではケニアの牧畜民チャムスおよびウガンダの牧畜民ドドスの現地調査を実施し、牧畜民が感得する「身の回り世界」を、自然と文化の両面から解析した。

研究成果の概要(英文)：This study explores how pastoralists in East Africa understand their 'umwelt', or surrounding world, through bodily senses, by employing an anthropological perspective and method. Humans perceive sensations through the five senses. The ability to integrate perception from different senses is the foundation of human nature and evolution, as well as a cultural and social construct. In this study, I analyzed the natural and cultural worlds that pastoralists experience through field studies of the Chamus pastoralists of Kenya and the Dodoth pastoralists of Uganda.

研究分野：人類学

キーワード：東アフリカ牧畜民 知覚 五感 環境 身の回り世界(Umwelt) チャムス ドドス

1. 研究開始当初の背景

これまでの東アフリカ牧畜民の生態や社会、また文化に関する人類学的研究において、人間と環境との関わり合いとして中心にとりあげられてきたのは、ウシをはじめとする家畜、そして水や牧草といった牧畜活動に直結したものであった。いわば、人間にとっての有用物がもっぱら論じられてきたといえる。それは、乾燥・半乾燥地という厳しい自然環境で、唯一「生産的に可能な(viable)」牧畜という生業を営む人びとの、物質的に直接的とも言える生活を端的に描きあげようとするものであった。だが、こうした研究の対象となってきた牧畜民とても、自らの身体がおかれた空間を満たすさまざまな音、時々風のもたらす匂い、特定の樹種が醸し出す香り、暑涼や乾湿、などを通して、身の回り世界における多様な事物や事象の状況を、全身をもって統合的な知覚によって捉えているのである。この知覚のありようを子細かつ客観的に呈示することなしには、牧畜民の日常生活は殺伐とした風景の中におかれた無機質的なものであるかのような印象を与えてしまいかねない。狭い意味での有用物だけに目を向けることは、牧畜民を含む人類がもつ豊かな「生」の全体を正しく理解することになるとは思われぬのである。本研究は、これまでの東アフリカ牧畜民研究において有用物に偏ってきた知覚の対象を、環境に存在するすべての知覚対象に拡大するとともに、人間が、それらを捉えるうえで、「五感」のそれぞれが相互に作用しあっていることに留意し、環境を生きる人間存在の全体的なあり方を明らかにするものである。

こうした研究は、アフリカではカラハリ狩猟採集民の研究には散見されるが(例えば、今村薫の「感応」的視座、『砂漠に生きる女たち』どうぶつ社、2010年、など)、牧畜民に関しては E. E.エヴァンズ=プリチャードの古典的著作である『ヌアー族の宗教』(平凡社、1982年、原著1956年)に萌芽的な記載がある他、国内外ともに未だ追究されていないのが現状である。本研究はこの欠落を埋めるとともに、『五感』に基づく世界知覚」という新たな視野を拓こうとするものである。1980年代以降、視覚偏重の知覚観に疑義を呈する形で始まった音や音環境の研究に目を向ければ、アフリカの内外で優れた論攷の蓄積がある。だが、その多くは人間が創り出す「音楽」や「歌」をとりあげた民族音楽学的研究か、おしゃべりや独白、演説といった「人の声(言語音)」を議論の中心に据えた研究である(川田順造『聲』筑摩書房、1988年; マリナ・ローズマン『癒しの歌』昭和堂、2000年、など)。そこには「自然界に由来する」音についての深い洞察や、「全体的な知覚の一環」としての聴覚という広い考察が欠けているように思われる。パプアニューギニアにおいて「音世界(sound worlds)の

人類学」という分野を切り拓いたスティーブン・フェルドは、こうした欠落を指摘し、批判しているが(「音響認識論と音世界の人類学」山田陽一編『自然の音・文化の音』昭和堂、2000年)、本研究はこの批判をさらに拡張して、環境に存在する全事物・事象を対象とし、また「五感」の統合的全体という視点を、聴覚・視覚以外の諸知覚にも適用するものである。

研究代表者は1986年以来、ケニアのチャムス(Chamus)やトゥルカナ(Turkana)、ウガンダのドドス(Dodoth)など、東アフリカ牧畜民を対象とした人類学的調査・研究に継続的に従事してきた。一連の研究における一貫した目標は、「身体」をよりどころとして、人びとが自己、他者、そして環境をいかに認識し、経験しているのかを解明することにあつた(『野の医療-牧畜民チャムスの身体世界』東京大学出版会、1998年; 「ドドスにおける外界認識と行為の現場」河合香吏編『生きる場の人類学』京都大学学術出版会、2007年、など)。だが、環境の知覚に関して、視覚以外の知覚を探る必要性を強く認識するに至ったのは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所における共同研究プロジェクト「『もの』の人類学的研究-もの、身体、環境のダイナミクス」(主査: 床呂郁哉、2007-2009年度)に関わってのちのことである。かつてのチャムスの医療および身体認識に関する研究では、内的身体感覚を軸に彼らの人間観を認識論的および存在論的側面から考究したが、この共同研究では、チャムスが環境に存在する「もの」をどのように知覚し、人間としての内的な全体性と整合させているかについて自省的に考えるに至った。未だ試論的なものであるが、その成果が聴覚に焦点を当てた「蟬時雨」の考察(「チャムスの蟬時雨-音・環境・身体」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』、京都大学学術出版会、2011)である。ここではチャムスが自らの牧畜活動空間を満たす音をどのように知覚し、その知覚内容をどのように「一人きり」で行われる放牧活動における単独行動(単独性)と結びつけているかを考察した。ここから、環境は、視覚のみならず、聴覚や、さらには嗅覚や皮膚感覚などの知覚が相互に作用しあいながら人びとに感得されていることが明らかになり、これらの諸知覚の全体を総合的に取りあげることの重要性に思い至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東アフリカ牧畜民が、自ら身をおき、行為する現場である「身の回り世界(Umwelt)」としての環境を、いかに全体的な知覚によって把握しているのかについて、人類学的な視点・方法から解明することにある。人類にはいわゆる「五感」の知覚機能が備わっているが、我々はそれらの統合作用によって、身の回りの事物や事象を取

り扱い、また同じ諸知覚をもつ身体的他者と社会的交渉を行う。知覚機能の統合性は人類の自然的（進化的）基礎であると同時に文化的・社会的な構築でもある。本研究では視覚、聴覚、触覚（皮膚感覚）などの諸知覚をいずれも同等の資格でとりあげ、牧畜民が感得する環境の包括性を、自然と文化の両位相において解析することを目指した。

人間と自然環境との実践的でマテリアルな関係については、主に生態人類学の分野で精力的に研究が進められてきた。一方、生活世界にある諸事物の認識体系については、認識人類学におけるフォーク・タクソノミーの分野を中心に詳細な事例が報告されてきた。これらの研究の蓄積に対して、本研究の特色は、人間が自らの身をおく空間を全身体で感じとる営み、すなわち、環境を「五感」で受けとめるという人間存在の身体的なあり方に着目することであり、理論的には、人類進化論的な視点をも取り入れて、「知覚の民族誌」から「知覚の人類学」へと深化する可能性を探ろうとすることにあった。

3. 研究の方法

5年間の研究期間内に、下記の諸点を明らかにするために、現地調査および国内外における研究機関等において諸資料・情報の収集をおこなった。現地調査の対象民族集団はチャムスとドドスの2集団とした（当初計画では研究期間は4年間であったが、途中、現地の政情不安や、現地調査中に罹患したA型肝炎の後遺症等の理由から、現地調査ができなかった年度があったために1年の期間延長をした。また、ケニアのトゥルカナにおいても現地調査を実施する予定であったが、同じ理由から断念せざるを得なかった）。チャムスとドドスは、いずれも長短および粗密の差こそあれ、研究代表者がこれまで現地調査を実施してきた集団であり、本研究ではその到達点を踏まえて調査を進めた。

現地調査では参与観察とインタビュー/ヒアリング、録音といった人類学における通常的手法を主とし、下記の4点を明らかにすべく集中的に調査したが、他方、アドリブ・サンプリング法により人びとの日常的な暮らしの全般に関するデータ収集も積極的におこなった。これに加え、人びとが経験している環境（「身の回り世界（Umwelt）」）と調査者（研究代表者）自らの実感の同質性と差異に関して客観性を担保するために、必要に応じてGPSによる位置確認、温湿度計による気温や湿度の計測、降雨量や風力などの気象測定などを組み合わせた。また、国内外の研究機関等において東アフリカ牧畜諸社会やその自然環境に関する資料、知覚や感覚世界などの関連テーマに関する文献や他の研究者の有する資料や情報等の二次資料を収集した。以下に主たる調査項目を記す。

(1) 事物・事象の知覚：有形・無形の事物

や事象の存在を、いかなる知覚を主要なものとして捉えているか（動物と視覚・聴覚、風と皮膚感覚・嗅覚、など）を網羅し、知覚相互間、および知覚と事物・事象間の相関を確認する。

(2) 位置取り：空間における身体的自己の位置取り（ポジショニング／オリエンテーション）のあり方を知覚との関わりで捉えるため、静止状態、および運動・移動状態にある諸個体が動員する知覚の質的・量的な調査をおこない、身体的位置取りと知覚の相関を確認する。

(3) 日常会話：知覚によって得られた情報を人びとが相互にやりとりする日常会話を収集し、その内容を会話分析の手法で類型化する。これにより知覚情報の流れの方向性や頻度を分析し、個体の知覚が集団内で共同性を獲得してゆく過程を追究し、年齢や性などの個体差がこれに果たす役割を確定する。

(4) 知覚に関する語彙：上記(1)～(3)を通じて、知覚を表現する語彙を網羅的に収集し、意味の相関を確認する。また各々の知覚に伴う内的感情（情動）語彙をあわせて収集する。

以上を軸に調査対象の2つの民族集団間の比較をおこない、さらにヒト以外の霊長類との比較によって進化的な議論を試みた。

4. 研究成果

(1) 現地調査の実施状況について

- ① 平成23年度：ケニアのチャムスおよびウガンダのドドスにおいて、60日の海外出張により、現地調査を実施した。
- ② 平成24年度：本来であれば3カ月程度のドドスにおける現地調査を予定していたが、ドドスの住むウガンダ・カラモジャ地域の政情不安により、現地調査を断念せざるを得なかった。
- ③ 平成25年度：前年度に調査に出られなかったため、それを補うために約5カ月間のやや長期的な調査をウガンダのドドスにおいて実施した。
- ④ 平成26年度：本来であれば、ケニアのチャムスとトゥルカナ、およびウガンダのドドスにおける現地調査を予定していたが、前年度の調査の際に現地でA型肝炎に罹患し、帰国後に入院、治療したが、肝炎は治癒したものの、大幅な体重減などの後遺症が残り、体力的に極めて過酷な現地調査に耐えがたいと判断し、現地調査を断念した。
- ⑤ 平成27年度：本来であれば、最終年度にあたって、ケニアおよびウガンダにおいて補助的な調査を予定していたが、上記平成26年度と同じ理由から、現地調査を断念せざるを得なかった。

(2) 上記、(1)の現地調査と国内外の研究機関等における諸資料・情報の収集で得たデータを整理・分析した結果、以下の知見を得た。

①知覚は非言語的な経験を多分に含んでいるため、言語表現を媒介にして、それを提示したり、共有したりすることが、当初、想定していた以上に難しかった。そのような極めて困難な状況における現地調査では、徹底的に人びとと行動をともにする参与観察法を積極的に採用し、彼らと環境、すなわち「身の回り世界」の経験を共有するように努めた。具体的には、集落内で過ごす時間はもちろんのこと、放牧をはじめ、水汲み、薪採り、他の集落への訪問などに出かける人びととともに行動し、作業現場や経由地である個々の場所で、環境が視覚、聴覚、嗅覚、触覚(皮膚感覚)等の知覚的にどのように受けとめられているのかに関して、言説的なデータ(つぶやき、語りかけ、会話等)、および非言説的なデータ(ジェスチャー、相互行為、身体接触等)を収集した。その結果、彼らの生活世界は、非言語的な経験に加えて、言説化され得る経験の表出を含めて構成されていること、すなわち、身体経験と言語表象の統合として成り立っていることが明らかになった。

②知覚に関わる語彙や言語表現をインタビュー/ヒアリングや日常会話から網羅的に収集した結果としては、知覚に関する語彙を含む慣用語やことわざが数多く認められ、さらに、歌や民話など、広く多様な言語活動の中に、知覚語彙、中でも聴覚や痛覚、触覚、肌感覚(かゆみ、冷たさ、暑さ、寒さ、湿度の高低など)に関わるものが少なからず確認された。さらに、鳥の聞きなしをはじめ、野生動物および家畜の声や気配に関わる言語表現も多数収集された。人びとは、視覚のみならず、さまざまな知覚によって、環境、すなわち「身の回り世界」を経験していること、むしろ、諸知覚における、いわゆる「視覚の優位性」がここでは認められないことが明らかになった。

③上記、②において収集されたそれぞれの知覚語彙が表す意味の広がりや、複数のインフォーマントへのインタビュー/ヒアリングによって把握するとともに、これらの語彙が実際に使われる具体的な会話場面における言説データを集め、それらの語彙が発せられた時の環境の状況をあわせて記録したところ、「内的感情(情動)」について、知覚との結びつきのある言い回しが数多く収集された。すなわち、「内的感情(情動)」もまた、外部環境に対する知覚と無関係ではあり得ないことが明らかになった。

④環境の評価に関するデータとして、気象観測(観天望気、気温、乾湿度、降雨量、風量や風速や風向、太陽の位置、竜巻、曇気、雷、稲妻、霞、虹など)や、沢や川の乾湿の程度や水位や水流、鉄砲水などの測定や記録をし、同時にその場に居合わせた人びとのこれらの現象に対する言説評価をあわせて記録した。その結果、人びとが日常生活の中で身をおくさまざまな場所(屋敷地、広場、放牧地、叢林、草原、湿地、砂地、ぬかるみ、河原、涸れ沢、井戸など)の状態が、言語的、非言語的に頻繁に表出・表現されることが分かった。また、季節や時刻によって変化する自然環境(放牧地の植生、水場の水量や乾湿の度合い、など)の状態は、多くの場合、その場に行き確認する以前にすでに把握されていることが明らかになったが、それはいつ何をどのように知覚することによって可能になっているのかについて、人びとの言説や行為を記録した。その結果、知覚される環境の客観的データ(音量、温・湿度、風向・風力、匂い、など)と人びとの知覚に基づく評価との間には、定型的な対応関係があることが明らかになった。

⑤以上のように、人びとは極めてきめ細やかな言説的、非言説的な諸活動を通して、「身の回り世界」を経験するが、ここで重要な点は、それが、同じ地域、同じ環境に「ともに生きる」人びとの間で共有されていることである。知覚の共有は、翻って、ある特定集団の人びとの間に「(他者と)ともに生きる」ことを実感させるよすがともなるのである。人びとは、同じ身体を持ち、外部環境を基本的に同じように知覚するという認識を、その知覚内容を頻繁に、また詳細に表出・表現しあうことによって達成されていると言ってよい。進化論的な観点からすれば、こうしたある集団に「ともに生きる」人びとの間における知覚の共有が、言語をもたないヒト以外の霊長類たちとどのようにつながっているのか、あるいは言語(というある種の「制度」)の獲得によって決定的な断絶があるのかどうかの検討は今後の課題として残された。また、このことは、他者と「ともに生きる」という意味での社会性(sociality)の進化とも密接に関連していることが想定される。これを検証してゆくためには、本研究でも積極的に取り入れた、環境の客観的な評価と、ジェスチャー、相互行為、身体接触等の非言語的な諸活動への着目、より重要になってくるものと考えられる。そして、そうした進化的な視点からの研究には、すでに研究代表者が本研究課題でも開始していることだが、人類学者のみならず、霊長類学者からの情報・知見を得、また意見交換をするといった共同研究が不可欠なものとなるであろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 河合 香吏、「サル屋とヒト屋の共同研究とは?『人類社会の進化史的基盤研究』の試み」『霊長類研究』Vol.31 No.2. pp.157-158. (査読なし)

[学会発表] (計6件)

- ① 河合 香吏、(招待講演)「広義の人類学から多角的にヒトの進化を考える:生態人類学」人類学若手の会第4回総合研究集会、2016年2月4日、於九州大学(福岡)。
- ② 河合 香吏、(招待講演)「ともに生きる:共同研究『人類社会の進化史的基盤研究』の試みから」第10回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「群れる・集う-人類社会の原点を問う-」人類学関連学会協議会・日本民俗学会第67回年会併催、2015年10月11日、於関西学院大学(神戸)。
- ③ 河合 香吏、伊藤 詞子、北村 光二、内堀 基光、西川 真理、水野 友有、座馬 耕一郎。「サル屋とヒト屋の共同研究とは?:『人類社会の進化史的基盤研究』の試み」第31回日本霊長類学会大会(自由集会)、2015年7月18-20日、於京都大学(京都)。
- ④ 河合 香吏、(招待講演)「東アフリカ牧畜社会における民族集団間の関係:家畜の略奪と武装解除をめぐる」第9回四大学連合文化講演会:環境・社会・人間における「安全・安心」を探る-安全で安心のできる社会-」2014年10月10日、於一橋講堂(東京)。
- ⑤ 河合 香吏、足立 薫、曾我 亨、内堀 基光、坪川 桂子、真島 一郎、諏訪 元。「人類の社会性とその進化:共在様態の構造と非構造」第33回日本人類学会進化人類学分科会、2014年11月3日、於アクトシティ浜松コンgresセンター(浜松)。

[図書] (計7件)

- ① 河合 香吏 (編著、執筆者全19名) 京都大学学術出版会(京都)、河合 香吏編『他者-人類社会の進化』2016年、454頁(1-18および207-225)。
- ② 河合 香吏 (共著、執筆者全17名) 東京大学出版会(東京)、春日 直樹編『科学と文化をつなぐ-アナロジーという思考様式』2016年、337頁(194-211)。
- ③ 河合 香吏、(共著、執筆者全17名) 東京外国語大学出版会(東京)、西井 涼子編

『人はみなフィールドワーカーである-人文学のフィールドワークのすすめ』2014年、295頁(156-176)。

- ④ 河合 香吏、(編著、執筆者全18名) 京都大学学術出版会(京都)、河合 香吏編『制度-人類社会の進化』2013年、420頁(1-14および219-236)。
- ⑤ KAWAI Kaori、(編著、執筆者全16名) KAWAI Kaori (ed.). *Groups: The Evolution of Human Society*. Trans Pacific Press & Kyoto University Press. 2013, 413P (1-17, 167-186, 323-345)。
- ⑥ 河合 香吏、(共著、執筆者全18名) 世界思想社(京都)、菅原 和孝編『身体化の人類学-認知・記憶・言語・他者』2013年、445頁(186-205)。
- ⑦ 河合 香吏、(共著、執筆者全30名) 明石書店(東京)、吉田 昌夫・白石 壮一郎編『ウガンダを知るための53章』2012年、372頁(212-215および216-218)。

[その他]

- ① 河合 香吏「ともに生きる-霊長類学と人類学からのアプローチ」(巻頭特集・責任編集)『フィールドプラス』No.14. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2-11頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河合 香吏 (KAWAI, Kaori)、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号: 50293585

(2) 研究分担者

なし。

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし。

研究者番号: